

カミングアウト

3年2組 5 番 大谷 綺佳

Key Word: 「LGBTQ+」「カミングアウト」「pride code」「同性婚」

1.はじめに

「LGBTQ+」とは、(L)はレズビアン、(G)はゲイ、(B)はバイセクシュアル、(T)はトランスジェンダーで体と心の性が異なる人、(Q)は自分の性のあり方を決めていない人、(+)のこれらに該当しない性の人を表す。この「LGBTQ+」の割合は、左利きの割合と同じと言われている。近年、LGBTQ+に該当する人口は増えつつあり、昔より可視化されていると感じる。それは、TikTokやX(旧twitter)などSNSの発達によって、匿名で発信しやすくなったからだ。私自身もSNSで目にする事が増え、知人が性転換したり、友達からのカミングアウトの影響で身近に感じている。また、「おっさんずラブ」のようにLGBTQ+の作品も増えている。このように、以前よりLGBTQ+への理解が広がっている世の中で、カミングアウトはしやすくなっているのか。

2.序論

前提として、当事者の中で秘密を隠し続けることから解放されたくて、カミングアウトしたい人と、無理にカミングアウトしたくない人など様々な意見がある。今回は、カミングアウトしたいと思っている人の手助けとなるアプローチを目指す。

3.本論

当事者の悩みについて紹介する。私の身近にいる当事者によると、学生時代に誰にも打ち明けられなかった、親や友達に打ち明ける事で関係がぎこちなくなりそうというのが大きな悩みだった。当事者にとって、一番の悩みはカミングアウトだ。「カミングアウト(coming-out)」とは、秘密を打ち明けるという意味で使われる。電通ダイバーシティ・ラボの研究によると、カミングアウトをしやすい環境になっていないと答えた人は、70パーセントにも上る。

このカミングアウトできないという状況はどのくらい辛いのだろうか。この、秘密を抱えていく苦しみは、コロナ禍のマスク生活に似ているのではないだろうか。私の体験的に、マスク着用義務が解除になってからも多くの人々がマスクを着用していた印象がある。その理由の多くは、素顔を晒すことへの抵抗だった。本当の自分を、評価されることへの不安において、この二つは似ているだろう。カミングアウトにおいて、一番重要なのが、周囲の人の反応だ。年代別にみると、次の表のように年代が上がるにつれて、割合は減少しているものの、若者から高齢者まで半数以上がLGBTQ+に対して、肯定的な反応を見せている。

	若者	子育て	中年	高齢者
社会全体で理解を進めていくべき	64.9%	60.9%	55.3%	35.0%
理解を進める必要はあるが、今はこのままでいい	21.1%	21.9%	36.2%	40.0%
理解を進めていくべきではない	-	1.6%	-	2.5%
その他	1.8%	1.6%	-	-
分からない	10.5%	12.5%	8.5%	20.0%
無回答	1.8%	1.6%	-	2.5%

また国別に見ると、日本のLGBTQ+の浸透率はどうだろうか。以下の表によると、2023年現在、日本は30カ国中29位とペルーと同率で最下位にあたる。

より、日本の現状を知るため、タイと比較した。タイを選んだ理由は、近年同性婚が認められたり、同性同士の恋愛を扱った作品が多く、国内、国外問わず人気でLGBTQ+に寛容だと思ったからだ。BLでは、「2gether」が公開後、X(旧twitter)で世界トレンド一位を記録し、GL(ガールズラブ)において、「GAP The Series」というドラマが、シリーズ平均1000万再生以上されるほどの人気だ。タイでの、LGBTQ+に対する受け入れ具合の調査のインタビュー動画で、計10人に対し「周りにどのくらいLGBTQ+当事者がいるか」という質問を行っていた。それに対する返答として、周りに20から30%いると一答えたのが2人、50%が2人、60%と答えた人2人、80%1人、90%台2人という結果だった。また、「LGBTQ+に対してどう思うか」という問いに対して、「当たり前」、「普通のこと」と回答していた。また、友達の紹介を受け、同世代のタイ人の子に質問を行なった。彼女は、周りに何百人ものLGBTQ+がいること、そして、彼女自身もバイセクシュアルであることを打ち明けてくれた。このことから、タイではカミングアウトに対して、重く捉えられておらず、当たり前のものとして行われていると考える。この寛容な価値観の背景には、人々のパレードなどの運動がある。

このことから、日本ではLGBTQ+に対して、まだ触れにくいという概念があると考えられる。その概念を覆していくには、周りの人が、LGBTQ+に対しての意見を可視化することが有効だ。具体的に、企業が行なっている例を紹介する。

一つ目は、Spotifyと朝日新聞の取り組みだ。Spotifyでは、LGBTQ+に対しての支持として「pride code」を行なっている。「pride code」とは、Spotifyと朝日新聞のLGBTQ+に対し行なう共同プロジェクトだ。ホームページより、「G7で唯一、同性婚や同性カップルの法的な権利を国として認めていない日本。しかし、国民の72%は同性婚を「認めるべきだ」と回答しているのです。そんな社会と想いの乖離を「声」の力で変える活動がPRIDE CODEです。署名をすることで Spotifyアプリのカメラで読み込みが可能になる特殊な言葉のバーコードを通じ、賛同頂いたアンバサダーたちの声を届け、Marriage For All Japan様と皆様の声を集めます。この世界を変えるのは、他でもない私たちの「声」だ。そう信じて、活動をしています。」と述べられている。この署名活動は、4月19日から21日に行われた東京レインボープライドで署名され、用紙は内閣総理大臣、すべての政党に提出された。また、歌手のちゃんみなさんやリナ・サワヤマさんといった影響力のある人を採用し、多くの人に活動を広め、より幅広い人の意見を取り上げる活動を行っていた。

二つ目は、Apple社のプライド壁紙が挙げられる。これは、LGBTQ+を意味する虹色をモチーフにした壁紙の7種類から選ぶことができる。これを通し、当事者やアライ(LGBTQ+に理解を示し、支援する人)の人達は、LGBTQ+に対し、比較的安易に意思表示ができる。三つ目は、チェリオの自販機だ。LGBTQ+の象徴である虹色に装飾されている「のんでCHANGE!」自販機で、売り上げの一部がレインボーイベントの費用にあてられる。この他にも現在は、LGBTフレンドリー企業が、およそ175社ある。このように、私もLGBTQ+に対し、意見を反映していくため、今年の9月にInstagramを開設した。主な目的は、LGBTQ+について触れるきっかけにしてもらい、さらにいいね数の表示によって肯定意見を可視化するためだ。また、Instagramを選んだきっかけは、私自身や私の周りの人も1番よく利用していて、1番の情報ツールだからだ。目標フォロワー数は50人だ。そして、LGBTQ+について書かれた曲や映画についての投稿をした。Billie Eilishさんの「Lunch」(同性に対する恋愛感情を歌った曲)など著名人の曲を投稿し、より興味を持ってもらえるようにした。私自身の経験より、LGBTQ+への価値観を変えたのが、ドラマや音楽などの娯楽だった。投稿の意図は、LGBTQ+を堅苦しいものと捉えず、身近なものとして認識してもらい、日常の一部に感じてもらうためだ。まだまだ、LGBTQ+のコンテンツは少ない。また、当事者の人にもフォローしてもらい、共感を得て、日常でカミングアウトできていない人の楽しみになれるような投稿を心がけた。

今のフォロワーは21人。中には、海外のフォロワーもいる。思うような目標に行かなかった。しかし、LGBTQ+について意思表示をするようになってから、友達がカミングア

ウトしてくれた。また、以前は親戚がはじめは、私に対して、「彼氏できた？」など性別に限定的な聞き方をしていたことがショックで、この研究をしていたため、恋愛対象を絞る言い方をしない方がいいと指摘した結果、「あなたは別に当事者じゃないでしょ？」と言われたことが、まだLGBTQ+を身近に感じていないことを痛感して残念だった。しかし、この指摘の後にも、タイの同性婚が可能になったことなどを話していくうちに、だんだんと受け入れていき、「恋愛対象の性別や恋愛に限らず、楽しんでいればいいよ」という発言をしてくれた。Instagramで多くの人に興味を持ってもらおうと思ったが、目標のフォロワー数には満たなかった。その原因として、Instagramを開設する時期が遅かったからだと考えられる。また、Instagramに加えて、多くの人が利用するTikTokも運用すれば探究に活かす事ができたのではないかと考える。

4. 結論

今回の、LGBTQ+のカミングアウトしやすい環境づくりのため、意思表示をすることに取り組んだ。この結果、周りのLGBTQ+に対する意見に対して、プラスの影響を与えられた。そのため、今後の課題として、Instagramの運用の継続、TikTokを新たに開設、また、この2つのアプリケーションを利用し、レインボーカラーの壁紙などを提供していきたい。また、当事者でない方ができる取り組みは、アライになることだ。セクシュアリティは、永遠に同じとは限らない。そのため自分も当事者になることを念頭に、取り組むことが重要だ。

5. おわりに

この探究を通して、環境の影響力を体感したため、改めて自分自身の環境を見つめ直すようになった。特に、タイのLGBTQ+の状況を知ったとき、また、本文には記載していないが、イタリアでは恋愛の話をする前に、自分の恋愛対象の性を話すことを教えてもらったときに実感した。また、ミャンマーからの留学生と話した時に、ミャンマーでは、まだまだ保守的な考えであることを知ったときだ。国が違うだけで、こんなにも考えが違うことを知り、自分が社会に、周りの人々に影響を与える1人だと、改めて実感した。そのため、これからの生き方はLGBTQ+のように、今もなお、当たり前だと考えられていないものに疑問を持てるような生き方をしていきたい。自分自身、まだまだ偏見を持ってしまっているかもしれない。それを正して、また、知らないうちに他人を傷つけてしまっているかもしれないことを念頭に、これからの生活を送ってきたい。

6. 参考文献

“「性の多様性についてのアンケート」”浜松市ホームページ

<https://www.city.hamamatsu.shizuoka.jp/koho2/moni/01-1/02seino-tayousei.html>,
(2024-7-3)

“PRIDECODE”朝日新聞ホームページ

<https://www.asahi.com/ads/pridecode/>